神戸学院大学
地域研究センター通信
Vol.1 2023年12月
CENTER FOR AREA RESEARCH AND DEVELOPMENT
CARD
KOBE GAKUIN UNIVERSITY

2022年2月より発行してまいりました「明石ハウス通信」は、このたび「地域研究センター通信」に生まれ変わりました。明石地域はもちろん、長田・有瀬地域にもわたる当センターの活動報告を、今後も発信してまいります。

稲爪神社秋例大祭フィールドワーク報告

神戸学院大学人文学部では、フィールドワーク活動の一環として、稲爪神社の秋例大祭に参加させていただいております。今年度は悪天候のため、神輿かつぎは見送りましたが、宵宮・本宮や獅子舞の練習を、学生が見学しました。

稲爪神社秋祭りに触れて

今回の稲爪神社秋祭りで感じたことは、祭に携わる地域の人々の間での円滑なコミュニケーションだ。

例えば、獅子舞の舞を終えた後の、次の住宅や施設への移動に無駄がなかったことや、次の住人も、到着後すぐに舞を始められるように予め待機ができていたという点である。このことからは、祭開催にあたっての社会的なコミュニケーションが感じられた。行程や段取りについての事前の共有が窺え、プログラムの合理的な進行に大いに貢献していた。

また、祭に多くの若年層が見られたという点からは、祭と関係のない普段からの地域的なコミュニケーションが感じられた。高齢化が進行中の大蔵地域で、多くの小中学生や二十代の参加があったのは、日頃からのコミュニケーションで地域活動への関心を深めることができていたからであろう。（矢嶋ゼミ1年　男子）

稲爪神社秋祭り

稲爪神社を見学、撮影してみて、大蔵地区の伝統的な雰囲気を味わい、大蔵地区の人たちの温かさに触れることができた。雨が降っていたのだが、撮影していると傘をさしてくれた人や、屋台が終了したにも関わらず、私たち学生のためにもう一度屋台を担いでくれた大蔵本町の方々に出会い、とても心温まる時間を過ごせた。秋祭りに参加してみて大蔵地区の人々がどれだけこの祭りを大切にしているかがよくわかった。雨の中楽しそうに獅子を舞う子どもたちの姿や、笛を吹く子どもたち、こどもたちを見守る大人たちの姿は、思わずカメラを向けてしまうほど心惹かれるところがあった。稲爪神社の秋祭りでは、伝統的な雰囲気を味わうことができただけでなく、大蔵地区の人たちの交流の深さを感じることができた。　（矢嶋ゼミ1年　女子）

稲爪神社秋祭りフィールドワーク感想

今回、11月7日に行われた稲爪神社秋祭りフィールドワークに参加した。そこで、西之組の獅子舞と早口流し、保存会の獅子舞を見ることができた。西之組の獅子舞は最後まで目を引き付けられる演舞で、とくに大人の舞いに迫力があった。早口流しは二つの歌い方があり、それを交互に歌いながら伝統の歌を披露した。三味線を弾く人が二人いたが、一切音が外れることなく最後まで奏でていた。最後に保存会による獅子舞の演舞があった。最初に小学生の子供たちが獅子舞を踊り、大人に負けないくらいの迫力と動きであった。そして、最後を飾る獅子舞の姿の時に、小学生が獅子の顔を持って一番上に立つことがあった。何度も失敗して泣きながらも、諦めずに最後までやり切った小学生の姿が、一番格好良かったといえる。秋祭りで二つの獅子舞と早口流しを見ることができて、良い体験ができたと思える時間だった。

（矢嶋ゼミ1年　女子）

西之組の獅子舞練習を観察して

大蔵谷西之組獅子舞保存会の皆様のご協力のもと、10月8日に開催された明石の秋祭りに向け行われる獅子舞練習に、フィールドワークの練習として参加させていただきました。

練習風景を観察すると、細かな動作の

指導や、芸における演者の安全性を考慮した話し合いなど、大蔵谷の獅子舞がもつ400年の伝統を継承しつつ新たに作り続けている場面を何度も目にしました。また聞き取り調査から、獅子舞練習や祭りは人同士を繋ぐ役割を持つ、大切な集いの場であることがわかりました。迫力のある演舞と対照的に、聞き取り調査を快く受け入れてくださった西之組の練習に参加して、開放的でありながらも古き良き地域社会が祭りと関わりながら今も生きていることを実感しました。　（三田ゼミ3年　手倉森奏帆）

保存会の獅子舞練習を観察して

2023年9月30日、私は大蔵会館で、保存会の獅子舞練習に参加した。 19時から21時、二部構成、秋祭りへ向けた練習だったが、大人の部に関して言えば、さながら運動部のような息遣い、想像していた獅子舞とは違った。途中で、保存会の方に獅子頭を触らせていただいた。青、赤、光っているという表現が似合う美しい髪の毛、耳を立てる、口を閉じるといった動作を持ち手に委ねられながらも、ずっしりと重い獅子頭を激しい動作で綺麗に見せる獅子舞は、踊りでありながら、伝統として継承される文化だと思った。大学の授業の一環としてだが、獅子舞の練習という、普段絶対見る機会のないものを見せて頂き、また、裏話を聞いたり、獅子頭を触ったり、月並みな感想になってしまうが、楽しかったし、面白かった。

（三田ゼミ3年　片岡恭平）

学生の活動にご協力くださいましたご関係の方々、そして地域の皆様に、厚く御礼申しあげます。

2023年7月23日　稲爪神社社務所にて

リーディング公演「リア王」を人文学部3回生が上演

人文学部の中山ゼミでは、2016年度より学生が戯曲を書いて上演する「アタシノアカシ」シリーズを行ってきました。戯曲制作という文学体験を行い、舞台に立つことによって人前に立つ自信をつけ、広報活動やスタッフワークで協調性や社会性を学んでいます。今年は初めての既成台本、しかもシェイクスピア四大悲劇のひとつ『リア王』に挑戦です。神社でシェイクスピア、なんてシブい！！

今回の上演は、学生に「高齢者問題」を身近なものとして考えてもらおうという試みでもありました。台本は伊藤茂本学名誉教授が松岡和子訳『リア王』(ちくま文庫)から、リアのジェンダー意識や女性嫌悪が顕著に表れている部分を抜き書きし、再構成してくださったものです。リアを演じることで学生たちは高齢者の心を知り、相手の立場に立って考える重要性を実感しました。

ゼミ生は全員が出演者としてキャスティングされ、その中の3名はさらに演出家として全体を3分割した1シーンずつを担当しました。またスタッフワークとして舞台監督、音響、衣装とプロジェクトリーダー3名とが協力し合って上演を成功に導きました。

当日は用意した客席がほぼ満席となる盛況ぶりでした。最初に長谷川弘基教授のレクチャーが行われたおかげで、観客はすんなりと物語をうけいれることができました。観客が集中するにつれて出演者も力を発揮し、アフタートークでは演出担当者たちが観客の質問に堂々と答えていたのが印象的でした。

数年続いた感染症がひと段落した中で、今回のリーディング上演は膝を詰めて話し合うことの大切さやその場を共有することの意味を実感させる貴重な機会となりました。また演技の完成度が上がるにつれて学生間の仲間意識も強まりました。演劇を通して、これまで自分にはなかった考え方を知り、チームで一つのものを完成させるという達成感を得ることができました。この仲間意識と充実感は、きっと後期の「アタシノアカシ」上演に活かされることでしょう。

創作演劇「アタシノアカシ」リーディング上演

12月20日(水)　13:45～15:15
於　マナビーホール(大学会館4F)
申込不要・参加無料

「地域研究長田センター」とは

(旧二葉小学校・ふたば学舎)

地域研究長田センター(神戸市長田区)は、地域と協働した実践的な研究を行う拠点として2010年11月に設立されました。ふたば学舎(旧神戸市立地域人材支援センター)が管理されている旧二葉小学校の校舎の一室をお借りしています。

設立時に、地震や気象災害に対する関心を地域の方々に持っていただく必要性に応じて、「地震・環境計測システム」を導入しました。ふたば学舎の屋上と地下に、気象および地震の観測測器を設置しています。

敷地内の地中に強振計(地震を感知する測器)と地下水位、水温の計測計を設置しているほか、建物屋上に気象観測の測器類を設置しています。気象については気温、湿度、風向風速、雨量、紫外線、日射量、気圧を測定しています。センター内のパソコンでデータの閲覧ができます。

(室内のモニター)

観測データは、近隣の小中高校の教材や地域防災のための情報としても活用していただくことができます。詳しくはお問い合わせください。

また、人類学や地域研究、社会学などを履修する学生の、長田地域におけるフィールドワーク活動にも活用しています。そのほかにも、ふたば学舎の行事や、神戸映画資料館所蔵資料のデジタル化作業などを通じて、地域との交流を深めてきました。

(フィールドワークの報告会)

このように、地域と協働した「学び」の拠点という役割を担っています。

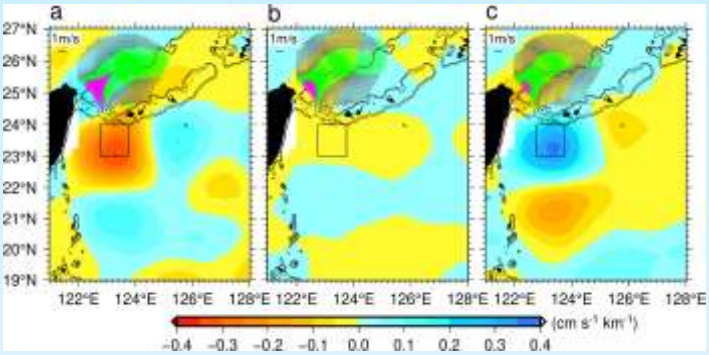
(長田センター屋上)

地域研究センター教員紹介

鹿島（かしま） 基彦（もとひこ） 准教授（海洋物理学）

Q.研究について教えてください。

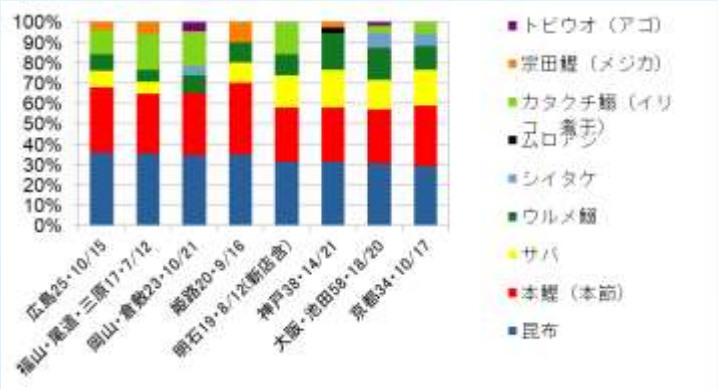
A. 海流などの海の物理環境を研究する**海洋物理学**が専門です。近年は特に黒潮流路や東シナ海大陸棚域への黒潮水流入に関わる台湾北東沖の黒潮に関心があります。この海域の黒潮は太平洋を西進する直径300 km程度の渦とモンスーンの影響を強く受けており、これを海洋レーダと人工衛星の海面高度計を用いて研究しています。また、この海域は日本最大のサンゴ礁海域でもあるので、海流による**サンゴの再生**の研究も行っています。



背景色は時計回り（暖色）と反時計回り（寒色）の渦を、ピンクと緑の矢印は黒潮の流速を示す。顕著な（a）時計回り（c）反時計回りの渦の台湾東沖到来時と（c）どちらでもない時。

Q.地域との関わりについて教えて下さい。

A. 海が食文化に与えた影響にも関心を持っています。海産物の多い歴史ある明石の街はこの研究に適したフィールドです。例えば、うどんの出汁には日本各地で海由来の地域性があり、学生と共に聞取調査をした結果、明石には畿内の特徴であるサバと山陽道の特徴であるカタクチ鰯の両方がみられ、文字通り両地域の境の街である傾向が**うどん出汁からも**確認されましたwww。また、明石名産のタコを用いた明石の「玉子焼き」はタコ焼にタコが入っている起源との説もあります。



畿内および山陽道の都市圏別うどん出汁食材。横軸の数値は回答を得た食材の種類と回答店数/質問店数を示す。

第7回 紙上版 くずし字解読講座

明石ハウスのYoutube「明石ハウスちゃんねる」では「オンラインくずし字解読講座」を配信しています。地域研究センター通信（旧明石ハウス通信）の紙上連載では、動画の内容の一部を紹介しています。

前回まではひらがな（変体仮名）を紹介してきました。しかし、くずし字で書かれたものには、当然のことながら漢字も多く使われています。草書体の漢字は、現代では目にする機会が少なく、馴染みがありません。これも、「昔の本が読めない」大きな原因のひとつです。

江戸時代の出版物、特に一般向けの本では、しばしば漢字にルビが振られています。ただし、そのような本であっても、頻出する漢字、すなわち人々が見慣れている漢字のルビは、省略されがちです。そして、この「見慣れている」の基準は、社会制度の異なる現代と少々異なります。

今回はその中から、敬語表現に使われる漢字を紹介します。明確な身分が存在した江戸時代以前の社会において、敬語表現は頻繁に、ごく当たり前に使われていました。

なお、古典文学には、主語や動作主などを明確に示さない傾向があります。敬語表現は、これらの類推にも役立ちます。

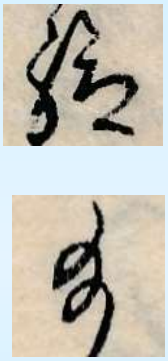
【一】御

体言・用言ともに、接頭語として用いられます。現代でも、のし等で草書体を見かける機会が多いのではないでしょうか。画数（書く手間）の少ない下の形がよく使われます。

【二】給

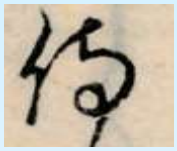
「～なさる」という意味の敬語動詞です。本来は「糸へん」と「合」を組み合わせた字ですが、「の」を二つ連ねた、画数（書く手間）の少ない形が、頻繁に使われています。

これに限らず、形が複雑であったり、画数が多かったりする頻出漢字の草書体には、記号化したものがしばしば見られます。



【三】侍

「ある」「いる」の謙譲語です。つくりの「寺」の草書体は、この字に限らず、ひらがなの「ち」の先が丸まったような形をしています。



画像はいずれも、明石ハウスちゃんねる「オンラインくずし字解読講座」で用いている『源氏物語湖月抄』巻十三「明石」から引用しました。

地域研究センターニュース

8月2日　あさぎり福祉センターにて

「明石市立松が丘小学校いどばた会議」に参加しました

松が丘校区の一部と、神戸学院大学有瀬キャンパスは、同じ朝霧川流域に位置しています。これをはじめとした様々なご縁から、松が丘小学校が地域と連携して行う学習プロジェクトについて考えるためのイベントに、教員7名、学生4名が参加しました。

松が丘の歴史や課題、小学校と地域との連携活動など、様々な話題提供のほか、グループワークも行われ、議論が活発に交わされました。

10月27日　松が丘小学校にて

「松が丘未来会議」に参加しました

この会議は、松が丘小学校6年生の児童が松が丘地区について理解を深め、まちの課題とその改善方法を考え、学ぶ取り組みです。神戸学院大学人文学部からは、矢嶋巌教授と鈴木遥講師が参加しました。

前半では、まちづくりに取り組む大人4名が基調発表を行いました。矢嶋教授は、地区の高齢化に伴う公共交通や生活インフラの維持、災害への備えといった課題を、人口統計データや住民の方への聞き取り調査の結果などに基づいて紹介しました。

後半では、児童がグループに分かれ、まちの課題とその改善方法を発表し、大人がそれを聴いて、意見をして回りました。

限られた時間でしたが、松が丘地区について一緒になって考え、認識を共有することができました。

7月8日･9日　稲爪神社にて

写真展を出展しました

大蔵地域のフィールドワークの中で学生が撮影した写真を、稲爪神社夏祭りに際して出展しました。その後も引き続き、境内にて展示させていただいています。

この取り組みは、2013年度以来、継続的に行っているものです。

8月8日　明石ハウス

「くずし字解読講座」を再開しました

2019年度に実施し、コロナ禍のために休止しておりました「くずし字解読講座」を再開しました。月に2回、江戸時代後期の刊行と推測される明石の地誌『明石名勝略記』を教材として、くずし字を読んでいます。

11月19日　あかし市民図書館にて

講演会「明石　朝霧　人麻呂のまち」を開催しました

あかし市民図書館の「地域学講座」として、「明石の文学」をテーマに研究を行っている人文学部の中村健史准教授が講演を行いました。この講演は、地域研究センターとの共催として、2023年度の大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ第2回でもあります。

今年は柿本人麻呂の1300年忌にあたります。講演では、その事跡と明石との関わり、資料をもとに解説し、柿本神社の「亀の碑」が果たした役割も紹介しました。

当日は多くの方にご来場いただきました。講演の詳しい内容は、地域研究センターWebサイトでも紹介しています。

発行元･お問い合わせ

神戸学院大学地域研究センター

〒651-2180
神戸市西区伊川谷町有瀬 518
（有瀬キャンパス３号館６階）
TEL 078-974-4232
（火・水・金 10:00～17:00）
FAX 089-074-4258
MAIL frb@human.kobegakuin.ac.jp
WEB https://card-kobegakuin.jp/

イベント情報や活動報告などはWebサイトでも発信しています

地域研究長田センター

〒653-0042
神戸市長田区二葉町 7-1-18
ふたば学舎（旧二葉小学校）３階

明石ハウス（大塩邸）

〒673-087 明石市大蔵八幡町 5-23
TEL 078-995-5414
（火・金 9:00～16:00、３月末まで）

大蔵谷駅　徒歩5分

建物（大塩邸、明治30年代後半築）は、明石市の都市景観形成重要建築物に指定されています。